

# 「こだま」66号の表記について

「こだま」編集委員会

## 1 趣旨

- (1) 作文学習の参考例文として、正確であること。
- (2) 読みやすいこと。

## 2 表記の基準

- (1) 常用漢字表に基づく。
- (2) 「送り仮名の付け方」に基づく。
- (3) 「作文学習ノート」に基づく。

## 3 留意事項

- (1) 同一作品中では同一の表記とし、混用しない。  
(例) 一所懸命 (二生懸命)
- (2) 常用漢字表に出ていない場合には原則として平仮名書きにする。  
ただし、やむを得ない場合には振り仮名を付ける。  
(摺師、奇しくも、昏睡状態)  
(すりし、くしくも、こんすいじょうたい)
- (3) 原則として「?」「!」などの符号は用いない。
- (4) 会話の部分は「」をつけ、地の文と行を別にして(改行)書く。  
次の書き分けに注意すること。

### 〈会話の表記例〉

○会話の部分で文が終わる場合  
「さあ起きなさい。起きないと行くからね。」

※ 八月十一日の朝早く、大はりきりの母に妹と私は起こされた。前日の夜に、明日朝早く出発するから早く寝なさいと言われて、九時に布団に入ったのだが、暑いのと、うれしいのとでなかなか眠られず、一人では起きられなかったのだ。

○会話のあとに文が続く場合

やっと花山キャンプ場という所に決まり、テントを張ることになったが、入り口の向きが悪いと言っては張り直し、せっかく張り直したのに風が入らないかとかで、また向きを変え、三度も張り直してやっと設置するありさまだった。キャンプ場を一回りしてきた妹が、

※ 「後からキャンプ場に来た人たちよりも遅くなったよ、みんなのテントではもう夕ごはん作ってんのにおかあさんいつまでやってんのお、夕ごはんどうすんのお。」

※ と、大声で母に言っている。家でも何が起ころうとも寝ることを一番先に考える母は、テント直しに夢中になり夕食を作る気などまったくない様子である。

## 4 表記の実例

- (1) 漢字と平仮名の使い分け  
○会話のあとに文が続く場合―残りの部分は改行して二マス目から書く。  
○会話のあとに文が続く場合―残りの部分は改行して二マス目から書く。
- (5) 題名と学校名、学年、氏名は「作品募集について」にならうこと。
- (6) 詩で行分けして書く場合に、次の行にかかるときは、一字下げ。

①原則として、漢字を使うことになっている例

ア 代名詞：彼・何・私・我々

イ 副詞：必ず・少し・既に・直ちに・再び・全く・最も・専ら

余り・極めて・初めて・果たして・特に

ウ 連体詞：明るく・大きな・来る・去る・小さな・我が(国)  
エ 接頭語：御案内・御挨拶  
オ 接続詞：及び・並びに・又は・若しくは

※ ただし次のようなものは、できるだけ平仮名書きにする。

且つ↓かつ 但し↓ただし 又↓また 外↓ほか

※ 次の接頭語は、その接頭語がつく語を漢字で書く場合は、原則として漢字で書き、その接頭語がつく語を平仮名で書く場合は、原則として平仮名で書くことになっている。

御案内・御挨拶    ご案内い・ごあいさつ

②原則として平仮名を使う場合の例

ア 代名詞：これ・それ・どれ・ここ・そこ・どこ・だれ・いずれ

イ 副 詞：かなり・ふと・やはり・よほど・こう・そう・どう・いかに・ここに・とても・すべて  
          なお・ひたすら・やがて・わざと・わざわざ・じらい・ひつきよう

ウ 連体詞：この・その・どの・あらゆる・いかなる・いわゆる・ある(ある日)

エ 接頭語：お願い・み心・かき消す・ごあいさつ・ごべんたつ・

オ 接尾語：惜しげ・私ども・偉ぶる・弱み・少なめ・子どもら

五分ごとに・若者たち・お礼かたがた

カ 接続詞：おつて・かつ・したがつて・ただし・ついては・ところが・ところで・

          また・ゆえに・しかし・そうして・そこで・そして

キ 動 詞：ある・ない・いる・おる・する・なる・できる

ク 助動詞及び助詞

          ない(現地には行かない)            ようだ(それ以外に方法はないようだ)

          ぐらい(二十歳ぐらいの人)        だけ(調査しただけである)

          ほど(三日ほど経過した)        まで            ばかり

ケ 次のような語句を( ) の中に示した例のように用いるときは、原則として平仮名で書く。

こと(許可しないことがある)            とき(事故のときは連絡する)

ところ(現在のところ差し支えない)      もの(正しいものと認める)

とも(説明するとともに意見を聞く)      ほか(特別の場合を除くほか)

ゆえ(一部の反対のゆえにはかどらない)  わけ(賛成するわけにはいかない)

とおり(次のとおりである)            ある(その点に問題がある)

いる(ここに関係者がいる)            なる(合計一万円になる)

できる(だれでも利用できる)            ない(欠点がない)

……あげる(圖書を貸してあげる)        ……いく(負担が増していく)

……いただく(報告していただく)        ……おく(通知しておく)

……ください(問題点を話してください)    ……くる(寒くなってくる)

……しまう(書いてしまう)            ……みる(見してみる)

……よい(連絡してよい)            ……かもしれない(間違いかもしれない)

……にすぎない(調査だけにすぎない)      ……について(これについて考慮する)

……にわたって            ……とともに

………ごとに            ………をもって            など

※ ただし、次のように、特定のものをさすときには漢字で書いてもよい。  
こと——事を好む

とき——法律の定める年齢に達した時

ところ——家を建てる所

もの——所持する物 裁判所の指名した物

※ 「等」は「とう」と読むときだけに用いる。

※ 「有り難う」は「ありがとう」と平仮名書きにする。

コ 外国の地名及び、人名は仮名書きにする。

次のように外来語の意義が薄くなっているものは、平仮名で書いてよい。

かるた・さらさ・たばこ

サ 動植物の名称は、平仮名書きにするが、常用漢字表で認めている漢字は使ってもよい。

ねずみ・らくだ・いぐさ・かわむし 犬・牛・馬・桑・桜 など

## (2) 数字の書き表し方（縦書きの場合）

1 数字は「零一二三四五六七八九十万億兆」を用いる。

百十二本 平成十二年十一月二十五日 五億六千万円 午後零時四十五分

2 金額など正確を期する場合は「壹・弐・参・拾」を用いる。

金壹万参千円也

3 「十百千」などを入れるのがわずらわしい場合は、省略して「〇」を用いる。

また、この場合、大きい数字には三けたごとに「、」を入れる。

二〇〇四年 七〇％ 五六、六二四人

4 概算の数字の間には「、」を入れる。

二、三人 十五、六％ 平成十、十一年

5 「ないし」の意味を表す場合には「―」を入れる。

平成五年―八年 二―三年の訓練 安政年間（二八五四―六〇）

6 分数は次のように表す。

三分の二 十二分の七

7 小数点は「・」で表す。

二・五六センチメートル 九二・五％

8 慣用で表記の決まっているものはそれに従う。

二百十日 二・二六事件 十三回忌

9 型式・化学記号などは慣用に従って算用数字を用いる。

水素原子量 1.00797

擬声語 仮名書き ワンワン ピー

擬態語 平仮名書き わくわく にこにこ ときどき